The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	藤井竹外略傳
Author(s)	北村, 學
Citation	懐徳. 1969, 40, p. 56-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90474
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

藤井竹外略傳

北村學

一

藤井竹外は攝津高槻の人である。「絶句竹外」の名があるように、七絶の一體で、江戸末期、一世を風靡した。代表的な詩集に「竹外二十八字詩」、他に「竹外亭百絶」などがある。また、その作は「安政三十二家絶句」には一九首、「文久二十六家絶句」には三三首とられている。

竹外を有名にしたのは、いうまでもなく「吉野三絶」の一つに數えられる次の詩で、

古陵松柏吼二天飈一　山寺尋レ春春寂寥
眉雪老僧時輟レ帚　落花深處說二南朝一

右については、貫名海屋が「雖レ厠二之唐賢中一誰能辯レ之」といっているように、りっぱに中國の詩でとおる。廣瀨淡窓はこれを唐の王建（一說には元稹の作ともいう。）の「行宮」の五絶に比して、「白頭宮女在、閑座說二玄宗一、未レ及二此句格韻双絶一」と斷じ、草場船山は「士開（竹外）以二此句一得レ名、宜二稱爲二藤落花一」といい、清人胡震（小蘋）は「誠如二諸君謂一有二唐音一確乎不レ謬」と評する。まさに格調すぐれ、情景そなわった詩といえよう。

こうした詩をものした人でありながら、その傳は從來あまり知られていない。わずかに、「三島郡の史跡と名勝」・「高槻通史」の册子に、舊制浪高の故天坊幸彥教授の紹介が見えるのみで、それもまた簡略である。

最近、舊高槻藩の家老内藤氏の出である北本好武氏によって、藤井家のことが、相當明らかにせられた。まず、それを拔き書きしよう。

藤井家は姓は藤原、小山兵衞尉朝政の後胤と傳えられる。鬼の抱柏をもつて家紋とした。小山朝政は下野の人、いわゆる天慶の亂、常陸に於て反亂を起した平將門を討平げた下野押領使のち鎭守府將軍藤原秀郷の後裔である。

また、

貞網（竹外の父）は享保三年（一八〇三）一月、二十歳で小姓役として召し出されて以來嘉永七年（一八五四）十一月二十五日（二十七日安政と改元）七十一歳で死ぬまで五十年餘りの長い間、役職にあった。それだけ中々の人物であったらしい。預所（幕府天領）の頭取を勤め、のちには用人兼郡奉行の要職をも勤めた。天保十一年（一八四〇）、貞網は功によって三十石を加増され、藤井家の家祿は都合百五十石となった。

とある。

ちなみに、右に見える貞網は、嘉永四年（一八五一）六十八歳で、なお用人の現職にあったという。竹外は當時すでに四十五歳に達していたことから推すと、竹外自らは、いわばのんきな勤めではなかったかと思われる。（大體、竹外は文政八年〈一八二五〉一月、十八歳で小姓役に召し出されているが、その後の役向きは明らかでないのである。）これが、むしろ竹外の詩作に幸いしたのであろう。ずいぶん方々へ吟行している。

その居所の關係から（後には京に移り住むが）東山・嵐山・伏見・巨椋池・保津峽・鞍馬・栂尾、攝河泉の近邊はもとより、比叡山も頂上をきわめているし、近江では鹿跳谷・永源寺、大和では奈良・月瀬・吉野、江戸勤役のついでもあって、美濃では養老瀧も二度訪れている。關原や富士も詠じ、觀音崎にも足をのばしたのではないかと思われる。江戸では上野・金杉・亀戸・佃島・梅屋敷と有名な所はへめぐり、詩嚢を肥やしている。

なお、河野鐵兜あての書簡には、長男貞臣と肥後から筑後を旅する趣のものもある。（これに關した詩が殘っていないので、それを果たしたのかどうか明らかでない。）

二

竹外は、文化四年（一八〇七）四月二十日、城内三の丸にあった役宅で生まれた。（後に屋敷替があって、今の高槻市民會館の前庭のあたりに移ったらしい。）名は啓、字は士開、また强哉、通稱は啓二郎、啓次郎、啓治郎、いずれの文字も用いている。（二郎」とはあっても、長男）また、書簡には「吉郎」もある。別號は雨香、小廣寒宮主人ともいう。夫人の名は「せい」、福山氏の女で、二男三女をもうけた。

元來、山陽の弟子であるが、山陽の沒後は星巖に師事した。

飄々たる性格で、風雅に徹し、詩酒に日を送った。よむところは、風物、人情に關するものが多く、時事につ

いてはまれである。といっても、時事に眼をふさいでいたのではなく、大鹽の亂の際には、浪華に火の手の上がるのを望んで、ただちに、それを斷じたと、江木鰐水は「二十八字詩」の序に記している。（もっとも、大鹽平八郎は、高槻の菁莪堂にも出講していたので、そのひととなりを知悉し、豫見するところがあったのだろう。）

弘化二年（一八四五）「竹外亭百絶」を出し、嘉永七年（一八五四）に「竹外二十八字詩」を編んでいる。

萬延二年（一八六一）致仕し、翌文久二年九月には京三本木に居を定め、慶應三年（一八六七）七月二十一日、數え年六十歳で沒する。菩提所は高槻北山の乾性寺で、この墓は後に大手本行寺に移される。撰文は賴支峰の手になり、碑面には「竹外藤井先生之墓」と刻まれている。（なお、乾性寺の方には、曾孫によって五輪塔婆が建てられ、法名は「一枝院竹外日開居士」とある。）別に、京東山長樂寺の山陽の墓のかたわらに、「竹外醉士」とのみしるした自然石のものがある。ここには、遺髮と印章を納めたらしい。

門下では、「春帆樓百絶」の高階春帆、「錦洞小稿」の市村水香などが、名を成した。

竹外のひととなりについて、森田節齋は「二十八字詩」の序に「疎放嗜酒」と記している。竹外の强酒劇飲、談論風發の面を强調したものと思われる。また、意に合えば「妙」と大呼する癖も述べてある。醉えばはだしで綠の草を踏んだことは、自注（「中澤生寒巖居」の詩の「許吾赤脚踏青苔」の句下）に見える。

逸話について、なお抄出すれば、

竹外が江戸勤番中、次のような話があった。江戸の藩邸付近の路上にて、ある日地圖を廣げて何か探している一人の武家があつたのを、折柄通りあわせた同藩士某が近づくと、それは竹外であつた。近よつて理由を問うたところ、竹外は顏をあげて安堵の色をうかべ、「實は他出しての歸途、藩邸への道が判らぬため、探しているところでござる」との答え、某は思わず噴き出して、「藩邸はこれでござる」と指さされてみれば、あにはからんや藩邸前であったという。

また、

東三ノ丸の佐藤家（「二十八字詩」にも佐藤精一の名が見える。）へは、しばしば訪れ深更まで歡談した竹外が、佐藤家の紋の入つた提灯を借りうけ、歸宅途中、はからずも名句が浮んだため、傍らの屋敷の塀に提灯をつりかけ、詩作に沒頭し、そのまま忘れて歸つた。夜が明けると思わぬ所に佐藤家の提灯がか

かつていたということは一再ならずあつたという。とある。これらは、いずれも詩に打ち込み、俗事を念頭におかなかったことを物語る。

竹外は、その飄逸な人がらで、周圍から愛され親しまれたようで、「二十八字詩」にあらわれたところだけでも、その交友は實に百十數人に及んでいる。もとより儒家文人が多くを占めるが、おもなものに、池内陶所・江馬細香・江馬天江・宇田栗園・大沼枕山・小原鐵心・金本摩齋・日柳燕石・河野鐵兜・神山鳳陽・齋藤拙堂・鹽田隨齋・貫名海屋・廣瀨旭莊・廣瀨淡窓・松橋江城・宮原節庵・村瀨士錦・諸葛中如・矢上快雨・梁川紅蘭・賴鴨厓・賴支峰・賴立齋ら、佛家にも金谷上人・月性上人・古嶽上人・實惠上人・雪莊禪師・梅塢道人ら、畫人にも大倉笠山・野呂介石・日根對山・村田香谷らの名が見える。

三

竹外は酒豪であったので、酒にちなむ詩も多い。

若い時分（天保の初め、二十三、四歳のころ）、鐵砲の名手として知られていて、酒席で、齋藤拙堂の問いに答えて、

神機奮發迅雷聲　耐レ可三一丸當二萬兵一

但令レ引三來三大白一爲レ君赤手掣二山鯨一

とほほえましい豪語をし、「春晴獨歩到三北林一」の引には「予有三脚疾一服三山内伯履藥一、伯履痛禁レ酒、今日偶來三花下一、飲則破レ禁不レ飲則殺風景矣、聊放言以自遣、但恐三伯履讀レ之認レ假爲レ眞也」とあって、

第幾番風到三早櫻一　壚頭春酒十分馨
先生何事仰レ天笑　豈可三花前我獨醒一

と詠じたが、これについては、師の山陽も「婦人之言不レ可レ聽レ之」と、後藤松陰も「先生此時飲可三八斗一而醉」といっている。

江馬天江が、死の前日、見舞った際にも、杯をかわしたことが、「二十八字詩」の序でうかがわれる。

その好物の酒を、江戸からの歸途、兩親のみやげに持って歸る詩もある。「抵三山崎一中子篤候三於途一有三瓢酒之贈一賦謝」に、

興窓何幸得三芳醇一　涓滴不レ須沾三我唇一
遊子囊中無二一物一　留三將此味一獻三双親一

右の詩に關しては、海屋が「公之耽レ飲類三畢吏部（畢卓）一、而興窓盡日忍レ渴不レ嘗二一滴一歸獻三之尊親一、所謂純孝」と評している。

事實、孝心があつくて、「歸レ家」に、

重侍三膝前一如三夢寐一　秋堂風露早涼初

連宵情話交二悲喜一　未レ有二工夫到二讀書一

また、「奉レ母遊二天保山一」に、

倚レ舷洗レ盞水生レ紋　喜見慈顏漸帶レ醺
一樣彩舟啣レ尾去　無二人不レ解レ載二紅裙一

とある。

子にも愛情の深い人で、「春日田園」に、

種レ桃繞レ屋是吾家　樹樹樹頭團二紅霞一

（「團」は「文久二十六家」では「籠」）

嫁二女西隣一呼可レ答　隔レ花機杼響咿啞

「似二女浦一」に、

自レ朝至レ夕學二彈箏一　見汝十三絃尚生
出レ谷黃鶯纔一囀　無二人不レ道二是簧聲一

「女柳訃至」に、

客中得レ訃痛何如　花笑鶯嬌不レ慰レ予
記汝垂髫能倣レ母　半旬前寄賀レ新書

また、「兒貞臣學レ書不レ成、出遊二筑後一從二加藤先生（加藤善右衞門）一學レ槍三年矣、書レ此以寄」に、

每レ思二阿臣一歎復歎　學レ槍難似二學レ書難一
（「臣」は「文久二十六家」では「貞」）
一針正直指南勢　早令二鄕人刮レ目看一

とある。

夫婦の間もなごやかであったようで、「中レ酒」に、

中レ酒今朝起更遲　如レ愁如レ夢又如レ痴
山妻怪我偷失笑　想到唐賢落第時

「怪石」に、

人二立階前一喚欲レ響　苔衣半破露二稜稜一
先生笑向二妻兒一語　是我平生耐久朋

とある。

師を敬慕する念も強く、江馬細香が訪れた時も「席上出二山陽先生遺墨一相與披觀久之」に、

爐香一瓣竹風寒　滿寫遺詩墨未レ乾
悲喜誰如君與レ我　姓名並自二卷中一看

「同二賴子剛（支峰）子常（立齋）大倉國寶（笠山）江馬信成及細香袖蘭（國寶の妻）二女史一遊二東山一、分二開花落レ地聽無レ聲爲レ韻余得二落字一」に、

十年吟社豈零落　結レ隊遊春殊不レ惡
嶺寺看レ花却引レ愁　無二人開レ口說二長樂一

「壬戌（文久二年〈一八六二〉）九月移二家三樹里一在二賴先生水西莊故址側一書レ感二首」に、

認二得孤亭一起整レ巾　此心不二說向二傍人一
依然山紫水明處　我喜移レ家恰作レ隣

往事悠悠嘆二逝川一　水聲依レ舊靜如レ絃
自二從梁木一摧一後　不レ漱二此流一三十年

また、「訪二星巖先生於墨水一」に、

葉似扁舟輕欲レ飄　沙禽飛盡水茫茫
讀レ騷高士家何處　兩岸春風杜若香

「雪夜」に、

榾柮爐邊坐二夜分一　奇寒銘レ骨酒無レ勳
鏗然折竹有レ聲處　雪沒星巖高士墳

とある。

交友の眞情のあふれるものは、「聞二矢上子聲（快雨）北遊死二糸魚河上一」の、

誰人掃レ地更燒レ香　雪沒二新墳一一丈强
家有二嬌兒啼覓レ乳　未レ知北越在二何方一

（「在」は「文久二十六家」では「是」）

また、「十月廿九日福山士貫書達二東山一曰二十八日東行登レ程、予知二追レ之不レ及悵然書寄」の、

馬前不レ得レ唱二陽關一　此日接レ書双淚潸
風雨琵琶湖上路　知君回レ首望二東山一

などがある。

竹外について特筆せねばならぬのは、竹を好む性である。「二十八字詩」三九九首中、竹に關するものは二二首を數える。

隣家の藪氏に美竹が多くて、「夜聽二隣園竹風一書二二十八二字」に、

一陣風來一陣鳴　虛檐夜靜見二秋生一
萬竿修竹非二吾有一　只領萬竿修竹聲

これが「竹外」の號のいわれでないかと思われる。由來、竹は四君子の一でもあるので、「醉士」をもって任じた竹外には、一種の謙辭でもあったろう。この竹が、嘉永元年（一八四八）江戸から歸ってくると、全部切り拂われていたため、非常に落膽して、「哭レ竹」六首を作る。その一斑をあげれば、

惜君失二却萬琅玕一　無二復清陰六月寒一
贏得家童長免レ課　不レ須每日報二平安一

十年曾與レ竹爲レ隣　今日無レ由見二此君一
長記讀書人不レ睡　秋聲才動最先聞

籲レ地尋レ君君不レ見　併無二一箇錦襁兒一
欲レ知双袖濕多少　恰似今春哭レ女時

右の詩について、廣瀨淡窓は「其事其詩一般奇絶、可レ入二詩話一」と、草場船山は「痛哭之情纏綿悱惻動レ人、足二以證二作者竹外亦竹魂詩魄一矣」という。胡震は「哭竹六首一氣呵成、痛讀一過、直欲下操レ斧爲二平安君一報上讎、竹乎竹乎、何不幸而遭二此俗奴辣手一乎」と述べている。

やがて、二十丁ばかり離れた能因塚の竹を移し植える。すなわち「竹」に、

兩三竿竹小齋宜　遠自二因公墓上一移
紛披歷亂青鸞尾　曾帶二清風一拂二斷碑一

と見える。いかに竹を愛したかが、察せられる。

四

「絶句竹外」とはいっても、七絶以外の諸體を作らなかったのではない。「二十八字詩」の末尾にも五絶二〇首が收められている。そのほか、「箕面山卽事」という七律が「箕山勝遊詩文集」の中に見える。また「竹外亭百絶」の篠崎小竹の序にも、「其所レ作古今諸體無レ不レ具焉、欝如二梅林飛二香遠邇一、而其居固在二淀江之濱一、豈非二江頭千樹春欲レ暗乎、今乃僅々拔二百絶句於其中一、實竹外之一枝耳」とある。

が、竹外自ら、諸體を含めぬ辯として、「長篇大作世皆稱二先師壇上一」・「僕才劣學淺不二敢效尤一、惟七絶摭レ情摸レ景僕甚好レ之」といったことが、宮原節庵の序に記されている。たしかに一種の見識といわねばなるまい。こうして、その後半生は七絶のみの道を歩んだようで、結果、世に絶句だけを傳えることになった。それが集大成されたのが「竹外二十八詩」で、他に現存するものとしては、「二十八字詩」に入れなかった「百」絶中の一四首と、「文久二十六家絶句」に見える家里松嶠に關する二首とが、まずそのすべてといってよかろう。

しかも、その精選した七絶にも、常に彫琢の手を休めなかった。淡窓は「一字不レ安推敲不レ措、往々至レ廢二人間慶弔一」としている。前記の「百絶」から「二十八字詩」に收めた八六首の中、三八首についても字句を改め、（これに關連して、「安政三十二家絶句」にとられた一九首中一首のごときは、再修正のあとも見える。）「文久二十六家絶句」に選ばれた三三首についても、一一首に筆を加える。したがって、「二十八字詩」の序に、小卷原齋が「酒是謫仙詩浪僊」と、岡本黃石が「併得長江與翰苑」と詠じて、いずれも「賈島」に比しているのも、ゆえなしとはいえまい。

こうした不斷の推敲が、竹外の詩を高からしめたわけで、胡震も、その詩を推稱し、しばしば、佳作・上乘・秀逸・秀雅・極佳・清俊・新俊・好詩・好句・雋句・才人・名手・好手・老匠・爲二宋人佳句一・勝二於北宋一・元人詩意不レ能二專美一等の語を與える。また、その連作（四首・六首・八首等）の法についても稱賛する。たとえば、「三月十七日公朔（板倉公朔）招二同江馬正人（天江）山田其正（梅東）松橋野逸（江城）一東山賞レ花、予適在二

京師ニ因亦與焉、得ニ八絶句一」の八詩を、「接咏八絶句讀來、一氣呵成而無ニ重複熟套之病一、各臻ニ其妙一、可レ分可レ合、如レ花如レ飾、如ニ春蠶吐レ糸妙緒無レ窮、眞乃生花之筆、餐蓮之舌、斯之謂レ善ニ於絶句一」と評している。

竹外の詩には拗體變格のものも散見する。これらについても、賴鴨厓（三樹）は「二十八字詩」の序に、「頃士開示ニ此集一、其係ニ變格一者毎ニ一詩一證ニ引作例數十家一、聲律奇變而不レ亂、燦然猶下抉ニ雲霧一見中列星ニ」と、一々もとづくところのあることを述べている。

古人の詩句を點化したものも多い。ずいぶん廣く詩書を讀んだらしく、「洛都要記」・「三柳軒雜識」・「酬世錦囊」などというものにも目を通している。

胡震は竹外の詩風に關して「揆ニ其平日所レ好大抵深ニ白詩宋人近體一」とする。竹外が白詩にひかれたことは、「白香山」の詩に、

巷女村童亦能唱　香山詩句皆和暢
知音畢竟屬ニ誰人一　後魏子孫唐宰相

と詠じたのでも明らかであるが、竹外の作風は、まず晩唐、宋の「香」といってよかろう。すべて、風物、人情、日常の一こまも微妙纖細に描かれ、しかも、時に絢爛豪華、時に悲愴痛切、あるいは脫俗清逸、あるいは諧謔明朗と變化に富み、また才氣にあふれている。

「竹外二十八字詩」は、珠玉の佳篇にみちみちたものと、いうべきであろう。